

平成二十八年年度

日本近世文学会春季大会

- ・ 大会プログラム
- ・ 研究発表要旨

期日 五月十四日(土)・十五日(日)・十六日(月)

会場 明治大学駿河台キャンパス

(教室は当日ご案内します)

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台一―

- 一、出欠の葉書を四月二十日(水)必着でお出しくください。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(日本大学生物資源科学部)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費七千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一五〇一五―六九六四〇〇八、口座名「日本近世文学会春季明治大学大会」)で、四月二十七日(水)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、大会二日目(五月十五日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙でご送金ください。
- 一、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。
- 一、三日目(五月十六日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季明治大学大会事務局

明治大学和泉研究棟 法学部 神田正行研究室

〒168-8555 東京都杉並区永福一―九一―

電話 〇三―五三〇〇―一三五六(直通)

メールアドレス mkanda@meiji.ac.jp

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、平成二十八年年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十八年四月一日

日本近世文学会春季大会会場校代表 神田 正行
日本近世文学会事務局代表 倉員 正江

〔事務局連絡先〕

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野一八六六
日本大学生物資源科学部 一般教養

電話 〇四六六―八四―三七八一
FAX 〇四六六―八〇―一〇八二
e-mail info@kinseibungakukai.com

〔会場〕 明治大学駿河台キャンパス 〔行事〕

第一日 五月十四日(土)
委員会 会(二二・二〇)～一三・四〇)
委員会会場 教室は当日()案内します
大会受付(一三・〇〇)
開会時間(一四・〇〇)
研究発表会(一四・一〇)～一五・四〇)
研究発表会会場 教室は当日()案内します

- 1 敵討物としての『復讐奇談安積沼』―南柚笑榊満人の敵討物からの影響―
- 2 京伝考証学の協力者―菅原洞斎を中心に―
- 3 山東京伝の黄表紙再考

明治大学(院) 伊與田 麻里江
大阪大学(院) 有澤 知世
棚橋 正博

日本近世文学会賞授賞式・総会(一六・〇〇)～一七・三〇)

懇親会(一八・〇〇)～二〇・〇〇)

懇親会会場 如水会館 オリオンルーム

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋二―一―
電話 〇三―三三六―一―一〇―一(代表)

第二日 五月十五日(日)

大会受付(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇)～一二・〇〇

研究発表会会場 教室は当日ご案内します

4 伏見版『標題句解孔子家語』の校勘註に見えるその底本と、日本への伝来について

慶應義塾大学斯道文庫訪問研究員

李 裕 利

5 幕府御大工頭鈴木長頼の文事

成城大学(非)

真 島 望

6 『花実御伽観』の粉本―写本『続向燈吐話』の利用について―

敬愛大学

畑 中 千 晶

昼 休 み(一二・〇〇)～一三・三〇)

編集委員会会場 教室は当日ご案内します

研究発表会 午後の部(一三・三〇)～一五・〇〇)

研究発表会会場 教室は当日ご案内します

7 都賀庭鐘の白話運用―『通俗医王耆婆伝』を中心に―

名古屋大学博士研究員

劉 菲 菲

8 高井蘭山の家系と著述活動

九州大学(院)

村 上 義 明

9 洒落本『列仙伝』は上田秋成作ならん

明治大学名誉教授

徳 田 武

閉 会(一五・〇〇)

第三日 五月十六日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

図書展示 山東京伝展

日時 五月十四日(土)～六月三十日(木) 但し五月三十日(月)・六月二十九日(水)は休館

図書館の開館時間中、自由にご観覧いただけます。開館情報は明治大学図書館ホームページでご確認ください。

(原則として、土曜八・三〇)～一九・〇〇、日曜一〇・〇〇)～一七・〇〇、平日八・三〇)～二一・〇〇)

場所 明治大学中央図書館ギャラリー

※会場にて『近世文藝』九一号・九二号を無料配布いたします。

※会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。

敵討物としての『復讐奇談安積沼』

—南柚笑楚満人の敵討物からの影響—

明治大学(院) 伊與田 麻里江

山東京伝の読本『復讐奇談安積沼』(享和三年刊)については、既に様々な切り口からの言及があるが、本作が敵討物であることについては、草双紙界の敵討物流行に乗ったものであることが指摘されるのみであった(徳田武『山東京伝全集』「解題」など)。本発表では、そうした草双紙界の流行が、どのように本作の創作に影響を与えたのか、その流行の契機となった南柚笑楚満人の作品と比較することで具体的に検証する。

『安積沼』は、敵討を物語の枠としつつも、登場人物が敵討に邁進する姿を叙述するだけでなく、敵討とは直接かわらぬ挿話も取り入れられている。そのため、『安積沼』は敵討物ではあるものの、敵討を主題として据えているかについては、疑問も呈されていたが、こうした構成は楚満人の作品にも見受けられる。また、『安積沼』には、山井波門の敵討だけではなく、小平次の復讐譚においても楚満人作品から取り入れた趣向が見られることから、『安積沼』の全体構成が楚満人の敵討物から影響を受けていることが知れる。

楚満人の敵討物の変遷を踏まえて改めて検討すると、こうした構成は、当時の読者の嗜好に沿ったものとなっていることがわかり、本作が好評であった理由の一端となっていると考えられる。さらに、京伝が、楚満人敵討物を大枠として踏襲したのは、読本の読者として草双紙愛読者層をも取り込もうとする、当時の京伝の読本創作態度を示すものと考えられる。

京伝考証学の協力者

—菅原洞齋を中心に—

大阪大学(院) 有澤 知世

山東京伝の考証活動が、「南畝とその周辺の学者・文人らの学芸圏」(井上啓治『京伝考証学と読本の研究』新典社、一九九七年)に支えられていたことは、既に多くの先行研究が指摘するとおりである。また、会や書簡を通じて様々な人物と情報交換を行っていることを考えると、京伝の知の全貌を明らかにするには、考証随筆に収録されている以外の事柄や、背後にある知的ネットワークへの目配りが必要であろう。

本発表では、秋田藩主佐竹家に仕えた絵師・鑑定家の菅原洞齋を取り上げる。京伝と洞齋については従来あまり注目されてこなかったが、『骨董集』(文化十一年刊)に資料提供者として洞齋の名前が見えるばかりか、絵巻の成立年代等を問う洞齋宛京伝書簡が存し(国立国会図書館蔵)、直接的な交流があったことがわかる。また、洞齋編『画師姓名冠字類鈔』(十三冊、写本、国立国会図書館蔵)は、京伝による、随筆未収録の考証等を掲載しており、両者間の知識共有は、双方向的に行われていたと推察される。

『画師姓名冠字類鈔』成立の背景には、谷文晁周辺絵師達の古画についての考証ネットワークがあったことが指摘されており(安田篤生「江戸時代における光琳像の変遷について」(下)『愛知教育大学研究報告』54、二〇〇五年三月等)、京伝と洞齋、さらにその周辺の絵師達が共有した情報を明らかにすることで、文化年間における文壇・画壇の交遊のあり方に迫ることができると考えられる。

山東京伝の黄表紙再考

棚 橋 正 博

恋川春町をはじめとする武家作家主導で草双紙界に黄表紙時代をもたらす。その後、町人作家として山東京伝などが追隨して黄表紙は新たな展開期を迎え、やがて寛政の改革によって武家作家たちは退壇する。

しかし、黄表紙の全盛期は続き、庶民文学としてますます定着し、読者層は全国的な広がりを見せる。その旗手として活躍した山東京伝の黄表紙を取り上げて、まず、武家作家たちと作風・作柄の違いを論ずる。

具体的には山東京伝の『江戸春一夜千両』・『心学早染艸』・『草下句虫干曾我』・『先開梅赤本』等に見られる町人生活における経済描写は町人作家にのみ見られる特徴で、武家作家とは明らかに異質なものであった。武家作家の退壇により、かえって黄表紙が町人文化の担い手として江戸および全国の読者へと浸透支持されてゆく過程を論じてゆく。

また、江戸風俗を細緻に紹介している遊びの文芸であったことで、江戸土産の絵本としても黄表紙は存在していたが、それがやがて普遍的なテーマである庶民生活における教訓物と敵討物へと移行していく。山東京伝においては初期の敵討物に回帰したわけで、これが長編化し合巻時代を迎えるまでを述べる。

伏見版『標題句解孔子家語』の校勘註に見えるその底本と、日本への伝来について

慶應義塾大学斯道文庫訪問研究員 李 裕 利

慶長四年（一五九九）徳川家康が刊行した伏見版『標題句解孔子家語』の底本に関しては「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」という原刊記の存在から、足利学校所蔵写本であるとされるもの（近藤重蔵『右文故事』巻五所収「慶長御版本」、明版の影響を受けた朝鮮の乙亥字本を底本と推定するもの（川瀬一馬『古活字版の研究』・山城喜憲「知見孔子家語諸本提要」）があるが、詳細な検討はなされていない。

この伏見版の跋文には、明版数本を以って考正したとの記事があり、「一本●作○」の形で、附録に至るまで全四十六箇所の校勘記が眉欄に記されている。この校勘記に着目し、伏見版と先行本三種を比較した所、乙亥字本（又はその覆刻本）が最も一致度が高く、明内府刻本、蒼巖書院本がそれに続く結果となり、特に一行の字数の一致から、乙亥字本系が底本であると確認できた。しかし、三種全てと一致しない場合も七件認められるため、さらに別の版本が参考とされた可能性もある。この事は伏見版の考正には少なくとも三種の版本が利用されていたことを意味する。中でも乙亥字本は補字の混入から、十六世紀半ば以後の刊行と判断され（活字の鑄造は一四五五年）、同世紀末までの数十年間に將來したものであることは確かである。本発表では、伏見版の底本に関する書誌学的検討に基づきながら、十六世紀末頃の学問の実質、及び東アジアにおける書物流通を把握するための、一つの手がかりを提供してみたい。

幕府御大工頭鈴木長頼の文事

成城大学（非） 真 島 望

鈴木長頼（号秋峰、通称長兵衛のち修理、明暦元々宝永二）は、祖父長次・父長常と同じく幕府御大工頭を務めた作事方の官僚であり、元禄期の日光東照宮改修などに携わった。

その一方で、幕府儒官人見竹洞を師として詩文をよくし、『本朝外考』（写本、貞享二序）・『桑華詩編』（貞享二刊）・『倭賦引事』（元禄十三刊）・『豆州熱海地志』（同年刊）などを編纂するなど、文事にも積極的であった。これらには竹洞以下の人見家の人々や林鳳岡から序跋が寄せられ、また、『鈴木修理日記』には、他にも石田末琢・清水宗川らとの交遊を確認しうる。和漢雅俗に渉るその文学活動は、文学史上注目するに値する。

しかし、これまでその文学活動に目を向けたのは、伊藤善隆氏による「鈴木秋峰宛書簡・詩懷紙十一通」（『湘北紀要』第三十号、二〇〇九年三月）以外は皆無に等しい。発表者はかつて『豆州熱海地志』における竹洞紀行文の地誌化を論じたことがある（『近世地方地誌の生成と伝播』、『成城国文学』第二十九号、二〇一三年三月）が、論の性格上、秋峰の文事全体を扱うことはできなかった。

そこで、本発表では、『豆州熱海地志』を除く主要著作を、近世前期の林家による国史編纂事業と、それに伴う日本詠史詩流行現象に連なる営為として位置づけ、また、前述の日記や『文翰雜編』の記事をもとに文事をめぐる交友関係を整理して、秋峰の文学活動全体の把握と文学史的な位置づけを行いたい。

『花実御伽硯』の粉本

—写本『続向燈吐話』の利用について—

敬愛大学 畑 中 千 晶

半月庵作、明和五年刊『花実御伽硯』の粉本については、つとに近藤瑞木氏が「玉華子と静観房—談義本作者たちの交流—」（『近世文芸』六五号、一九九七年）において、写本『向燈賭話』の利用を指摘しておられるが、このたび三七話すべての粉本を確認するに至ったため、その結果を報告する。新たに粉本として確認したのは写本『続向燈吐話』（国文学研究資料館三井文庫旧蔵資料）で、『花実御伽硯』全三七話のうち三〇話と序文が、この書に由来している。また、『新著聞集』からも五話を用いていることを確認した。

『向燈賭話』『続向燈吐話』は、ともに静観房好阿『諸州奇事談』の粉本となっている。つまり『花実御伽硯』は、浮世草子に分類されてはいるものの、『諸州奇事談』と粉本を共有する奇談集なのである。篠原進氏はかつて、長谷川強氏の『浮世草子考証年表—宝永以降』（青裳堂書店）から刪る候補の代表例として本作を掲げたが（『浮世草子の汽水域』『浮世草子研究』創刊準備号、二〇〇四年）、粉本を特定したことで、その方向性は一層強まるものと思われる。

本発表では、写本『続向燈吐話』が『花実御伽硯』に取り込まれた際の改変部分、および、『新著聞集』を利用した効果等に着眼して、刊本としての対読者意識や自主規制のありようについて考察する。また、静観房好阿の粉本利用と対比させつつ、人気を左右したに違いない語り口の巧拙にも検討を加える。

都賀庭鐘の白話運用

— 『通俗医王耆婆伝』を中心に —

名古屋大学博士研究員 劉 菲 菲

庭鐘作『通俗医王耆婆伝』は、『大蔵経』所収の『仏説奈女耆婆経』を下敷きにした翻案作品である。原拠の『耆婆経』は通常の漢文で記されているが、『耆婆伝』には大量の白話語彙や表現が含まれている。それらは、庭鐘がことさらに付加したもので、庭鐘の白話に対する意識、また白話運用の実態や能力を知る上で大きな参考となる。

まず、『耆婆伝』に使われる白話語彙や表現等を全て抽出した上で、『耆婆伝』と『耆婆経』の本文を比較対照し、庭鐘が白話を取り入れる手法を探る。すなわち、『耆婆経』中の文語を白話語彙に置き換えること、『耆婆経』の行文に白話語彙を点綴することの二つの手法を取っている。その際に、相応しい白話語彙を選び、適切な箇所へ挿入しており、庭鐘の高い白話運用能力を物語っている。ただし、接続詞「隨便」、副詞「還是」、前置詞「把」などについては誤用が確認され、庭鐘が中国人に直接語学を学んだのではなく、あくまでも書籍を通して習得に励んでいたことが推量される。さらに、『耆婆伝』白話語彙の出拠を調査したところ、白話小説『水滸伝』『金瓶梅』『禅真逸史』『禅真後史』『今古奇観』『三言二拍』にあることが判明した。それらは何れも庭鐘の読書範囲にあったことがわかっている。『耆婆伝』の白話の使用実態や運用手法を見ると、創作の際に、庭鐘が自製の白話語彙の単語集のようなものを机上に置いて随時参照していたことが想定されるであろう。

高井蘭山の家系と著述活動

九州大学(院) 村上 義 明

高井蘭山(天保九年没、七七歳)は、日本文学史上において読本作者・戯作者と認識されている。しかし蘭山の一二〇を超える著述は小説に限ったものではない。生前より「雑家」と分類された蘭山は、往来物、女訓書、注釈書、農業、天文、俳書といった様々なジャンルの著作を出版し、それらは明治に至っても読まれ続けた。出版・文化・教育史上において、もっと注目されるべき人物であるといえる。

本発表では、これまで十分に明らかにされてこなかった「雑家」高井蘭山についての行状を、彼の著作に散見される情報から描き出す。まず蘭山の職分については、従来、『名人忌辰録』等に載る「芝伊皿子に住す幕府与力」という記述の真偽が確かめられていなかったが、稿本『早字節用集』に「芝伊皿子台大御番与力」とあることを指摘する。

次に蘭山の家系について、祖父も幕臣で、俳諧を志村無倫(季吟門)に就いて学んだこと、また伯父の素月は江戸座の俳人存義・買明と交流があったことなどを報告する。このように俳諧に親しむ家系に育ったことは、蘭山の交遊関係や著述活動にも少なからず影響を与えていると思われる。

最後に、蘭山の著述の多くを刊行した書肆花屋久次郎との関わりにも言及する。

洒落本『列仙伝』は上田秋成作ならん

明治大学名誉教授 徳田 武

宝暦十三年に、大坂の平野屋東助から刊行された『列仙伝』（先賢卜子製作）は、上田秋成が三十歳の当時の浪華の騷人たちを多数登場させ、秋成その人と目される「ぞるん」（漁焉。秋成の俳号）も挙げられている点で、秋成の周縁に在る人物の作品であると見られてきた。この見方を更に推し進めると、秋成自身がその製作に関わっている事もあり得る、となる。

そこでその文章と、秋成晩年の回顧録とも言える『胆大小心録』（文化五年執筆。七十五歳）とを読み合わせると、松木淡々に就いての記述と、遊里の盛衰を語った文章とには、極めて近似したものが見出される。それは、両者が同じ人物によって著わされたことの結果であろう、と考えられる。これは、『列仙伝』に記した事の記憶が、老齢になるまで維持されていて、または『胆大小心録』に書き付けられた、という現象であろう。

そのように『列仙伝』を秋成の作品であると仮定すると、顔を傷つけて膏葉を貼っている「伊津や雪」が、柳里から竹の画の幟をもらう、とある『列仙伝』の記載は、同じ秋成作「諸道聴耳世間猿」巻三の一「器量は見るに煩惱の雨舎り」で、額に膏葉を貼った尼（正慶尼。木津屋こ万）と柳屋権兵衛（雅名は里江。柳里恭）との葛藤が描かれることの原材料である、と観られるのである。

『雨月物語』の板元野村長兵衛が、『列仙伝』に登場するのも、早くからの秋成との関係を示すものであろう。

◆会場へのアクセス

- JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩約3分
- 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩約5分
- 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩約5分

